

会報

たんばうるし

—会報第21号—

2023.1.20



—謹賀新年— 明けましておめでとうございます

今年度も概ね例年通りの規模で、漆掻き・植栽地管理・新植栽事業を継続しています。イベントは2年間お休みしていた「うるかむまつり」を開催することができました。また、嬉しい出来事が色々ありましたので、ご報告させていただきます。11月に福知山市で竜王戦が行われ、その記念品として作られた扇子に丹波漆を使用させていただきました。12月には社会貢献者表彰を受賞させていただきました。今年度も、漆掻き見学の受入や学生の皆さまとの活動も行っています。「うるかむまつり2022」の報告を中心に、ぜひご覧ください。

2023年もどうぞよろしくお願いたします。



2022年11月8日・9日に、第35期竜王戦七番勝負第4局福知山対局が福知山城にて開催され、その際の記念品として制作された扇子に、丹波漆が使用されました。使用されたのは親骨と呼ばれる部分で、精製した丹波漆を白漆にして塗り上げられ、蒔絵が施されました。漆の白は明るく仕上げるのが難しい色ですが、透けがよい性質が反映されて、明るい色味に仕上がっています。

このような貴重な機会に丹波漆を使用していただき、光栄に思います。扇子は現在、福知山城に展示されていますのでぜひご覧ください。より広く福知山市内外の様々な方に知っていただけることを願っています。



福知山明智扇子「清竜」

福知山明智扇子「清竜」には、過去から未来に連綿とつながる福知山の人々の姿を表現したいという願いのもとに、「丹後和紙」、「丹波漆」といった福知山市の自然、伝統文化を素材として、この地の人々の想いを表現しました。青く清き竜が玉を追い求める姿は、未来をめざして力強く挑戦を続ける人々の姿が表されており、親骨に描かれた蒔絵には、激しく躍動する時代、人々のうねりの中で、ひとときわ輝き続ける希望の明星が表現されています。福知山市の伝統文化、自然、人々の想いを乗せたこの扇子は、まさにこのまちの姿形を象るものとなりました。

画 日本画家福田千恵画伯 扇面・扇親骨蒔絵原画

日本藝術院会員、日展理事、新日春会副会長。日展文部大臣賞、日本藝術院賞受賞。福知山市出身の文化勲章受章者、名誉市民である日本画家、佐藤太清画伯に師事され、平成十三年より二十年以上に亘り、福知山市佐藤太清賞公募美術展の審査委員として就任いただいております。

この御縁により、扇面、親骨に使用した原画を制作いただき、波間に浮かぶ希望、未来に臨む清き竜の姿によって、福知山で挑戦を続ける人々の想いを描いていただきました。

漆 丹波漆 扇親骨

「丹波漆」は約千三百年前、遙か奈良時代からの古い歴史を持ち、現在はそのほとんどが姿を消した良質な国産漆の一つです。近年では、京都東本願寺の御影堂天井に使用されています。透明感のある美しさを持っており、この特徴を最大限に生かすため、本扇子には白漆として使用しました。

この貴重な国産漆は、伝統的な漆掻き技術で漆を採取する、福知山市夜久野町の「NPO 法人丹波漆」によって、未来に向けて守り育てられています。

紙 丹後和紙 扇地紙

福知山市大江町は古来より京都府内有数の和紙産地として栄え、明治時代後期には二百もの和紙製紙所が立ち並びました。和紙に適した美しい水に恵まれ、この地で育った良質な楮から、独特の風合いを持つ「丹後和紙」が生み出されます。

現在ではこの地域の和紙製紙所は「田中製紙工業所」のみとなりましたが、楮栽培から冬の寒さらし、山水を使って和紙を漉く伝統技法を守り伝えながらも、和紙の新たな可能性を追求し続けられています。

(福知山明智扇子「清竜」しおり 福知山市 より抜粋)

写真資料提供：福知山市

— 京都府 学生×地域つながるプロジェクト —

京都府 学生×地域つながるプロジェクトとは

- ・大学生の地域活動への参画を通じて、地域団体（NPO等）と大学生の交流・協働の促進や地域の新たな担い手を育成する事業。
- ・2022年度、京都府下で11地域団体のもと54名の学生が活動中。

これまでの「丹波漆チーム」の活動

1年目：2020年度の活動

- ・京都府「学生×地域つながる未来プロジェクト」 学生2名参加
- NPO法人丹波漆と学生のオンライン交流と学生による丹波漆のSNS・HP発信

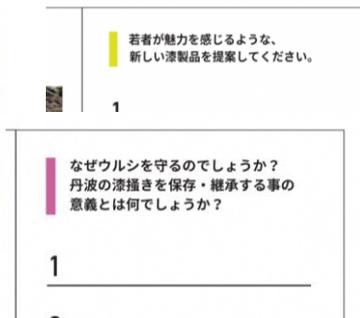


2年目：2021年度の活動

- ・初年度活動を発展させ、
オンライン交流と現地訪問を通して
丹波漆の発信プランの立案と実行
(学生9名参加)
(福知山市若者まちづくり未来ラボ
事業プロジェクト助成(後期)採択)



- 発信企画 ①「丹波漆を考えるアイデアブック」の作成
参加学生・NPO法人丹波漆・やくの木と漆の館・京都府、、、
«学生と多様な関係者が「丹波漆について考えてほしいこと」を
テーマに考えた質問集»



- 発信企画 ② ウルシマップ(仮)の試作
地域内外の人に、ウルシを身近に感じてもらうため、
ウルシが生える場所を紹介するマップづくり

本年度の活動 【テーマ】漆を未来につなぐには 一漆を知り、体験し、実践してみよう

- ☆ 様々な課題を抱える丹波漆を、どのように未来につないでいけるか？
 - ・丹波漆が抱える課題とは？
 - ・丹波漆を残す意義と、可能性とは？

【前半：8～11月】

- ① 丹波漆の課題を知る：丹波漆の現場見学と関係者との交流
- ② 丹波漆の現状・課題を伝え、ともに考える
 - ：一般向け漆植栽体験イベント(運営補助)
 - ：地域住民ら対象ワークショップ(企画・運営)

【後半：12月～3月】

- ③ 丹波漆を発信する：丹波漆を紹介する観光マップの作成
- ④ まとめ：丹波漆を未来につなぐ方法を考える

現在、4回の現地活動を終えたところで、漆掻き見学や体験、自生ウルシ調査、地域の方との交流などを通じ、夜久野地域や漆についての知識が深まっているところです。昨年度の発信企画ウルシマップの作成に向け頑張ってください！



イベント報告 うえるかむまつり 2022

森下航平（京都大学総合人間学部）・岡野太郎（名古屋大学経済学部）・
古田悠（南山大学人文学部）・安河内陽菜（大阪成蹊大学経営学部）

0. イベント概要

NPO 法人丹波漆による、毎年恒例の漆植栽イベント「うえるかむまつり」であったが、コロナ禍の影響により、延期や地域内住民を対象とした小規模イベントとしての実施を余儀なくされていた。本年（2022年）は、地域外住民も迎えての三年振りの盛大な開催となった。

午前は、『みんなでウルシを考えよう』講演発表会（京都府「令和4年度豊かな森の恵み創造事業（森の文化発信）」）と題し、ウルシに関する研究発表やパネルディスカッション、ワークショップを開催した。また午後は、「漆の植樹祭」が行われ、参加者らは漆の植栽と名付けを楽しんだ。

1. 「みんなでウルシを考えよう」講演発表会

<概要>

日時：令和4年11月12日（土）9時30分～12時30分

場所：夜久野ふれあいプラザ・研修室

後援：福知山市

註：京都府令和4年度豊かな森の恵み創造事業（森の文化発信）



<当日のスケジュール>

9:00～ 9:30 受付

9:30 開会

9:40～10:10 発表「ウルシの内樹皮と樹脂道の形成過程と構造」

（発表：二社谷悠太氏・京都大学農学部4回生）

10:10～11:00 パネルディスカッション「ウルシに傷をつけると樹液が出る」を考える

（パネラー：岡田直紀氏・京都大学大学院農学研究科元教員、二社谷悠太氏・京都大学農学部4回生）

（コーディネーター：大藪泰・NPO 法人丹波漆）

11:10～12:30 ワークショップ「学生と漆をかんがえる」

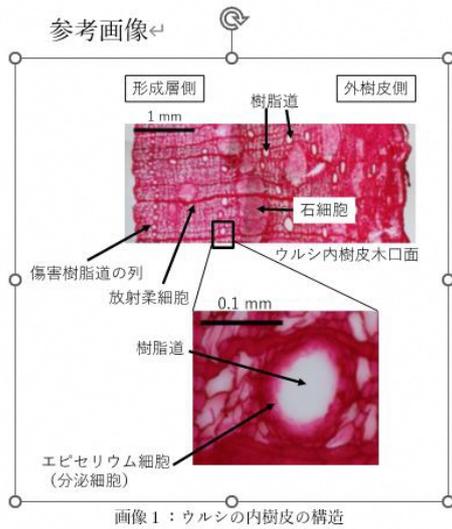
（コーディネーター：森下航平・京都大学総合人間学部4回生）

<内容>

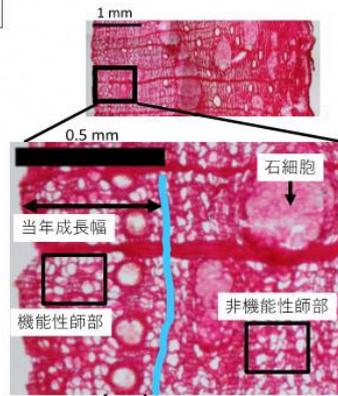
①発表「ウルシの内樹皮と樹脂道の形成過程と構造」（発表：二社谷悠太氏・京都大学農学部4回生）

樹木としてのウルシに興味があり、内樹皮と樹脂道について研究している。国産漆が少ない現状において、樹木としてのウルシ研究を発展させることによって、ウルシ産業の発展に貢献したいと考えている。漆掻きにおいて、漆液の量や質が採取時期によって異なることが知られており、これらの原因を科学的に探究していきたい。

そもそも、樹木において樹皮は内樹皮と外樹皮に区別される。ウルシの内樹皮には樹脂道がみられ、樹脂道には外傷



画像1：ウルシの内樹皮の構造



画像2：内樹皮の当年成長幅

をきっかけに形成される傷害樹脂道と、傷害とは無関係に形成される正常樹脂道がある。これら樹脂道のなかに漆液が存在している。研究では、傷害樹脂道の形成にかかる時間や、樹脂道の数や分布および内樹皮の1シーズンにおける成長幅の個体差、内樹皮の厚さと幹の直径の関係について調べた。研究結果より、傷害樹脂道の形成にかかる時間は1カ月程度であることがわかった。つまり、傷をつけばすぐに傷害樹脂道ができるというわけではないことがわかった。

樹脂道の数、樹脂道の分布、内樹皮の1シー

ズンの成長幅については、個体差は見られたものの、傷の地上からの高さによる違いはほぼ見られなかった。個体差があることを考慮に入れ、多数の植栽を行うことが安定した漆の生産に有効であると言えよう。

内樹皮の厚さと幹の直径の関係については、一般に、漆掻きが行われる10~20年生のウルシでは、内樹皮の厚さは幹直径に比例して増大することがわかった。木が若すぎると内樹皮は薄いため、現在行われている10数年という殺し掻きのスパンは理にかなっていると言える。

漆液の量と質の変化とその要因について、葉の付き具合や植栽環境、分根・実生の別などから調査し、植栽方法、漆掻きの手法の評価や改善に資する研究を進めていきたいと考えている。

研究を進めるなかで、ウルシや漆掻きの奥深さを感じた。夜久野は現在新しく植栽地を増やしている、いわば発展途上の漆産地であり、その過程における試行錯誤そのものが漆文化の財産である。今後も研究を通して、夜久野の漆文化の発展に寄与していきたい。

②パネルディスカッション「ウルシに傷をつけると樹液が出る」を考える

(パネラー：岡田直紀氏・京都大学大学院農学研究科元教員、二社谷悠太氏・京都大学農学部4回生)

(コーディネーター：大藪泰・NPO 法人丹波漆、補助説明：山内耕祐・NPO 法人丹波漆)

(パネルディスカッション 主な発言)

・樹液は傷を守るためと言えるか。

—そう解釈できるのではないか。人間のかさぶたのように、物理的に保護する機能を有している。

・樹脂道内に蓄えられている樹液は、漆液の状態なのか。

—おそらくそうであると考えている。

・樹脂道から樹液が流れ出た後、樹脂道には再度漆液が充填されるのか。

—充填されるのではないかと考えている。今後研究してみたい。

・樹脂道の長さや枝分かれはどのようなようであるか。

—観察によると、三叉路のような樹脂道は見られなかった。一本の長さは最低でも10センチ程度であった。

—ゴムの木の場合は、一本に繋がっている分枝はしていない。ウルシの場合も似た構造である可能性がある。

・道管や師管、樹脂道に酸素は存在するのか。

一道管は、気体としての酸素が発生すると内部の水のつながりがちぎれる性質がある。師管、樹脂道も液体に溶けた酸素は存在しても酸素が気体として存在することはないと思われる。

・衣川光治氏は「漆は自らの作用で液をサラサラにしている」と言っていた。そのような作用は確認できるか。

一ウルシオール合成過程や、ラッカーゼのはたらき具合については、まだ十分解明されていない部分がある。研究上の今後の課題である。

一通常の漆掻き頻度より間隔を空けて漆掻きをすることで、漆がよりサラサラになることがあると感じている。

一傷をつけてからの時間差により粘度が変わる可能性が考えられる。

(漆液中のウルシオールと水分の量の変化により、漆液の粘度が変わる)

・初鎌のときの漆液を採取しないのはなぜか。

一初鎌の際の漆液は、前年もしくはそれ以上前より存在している漆液である可能性があり、漆掻きの年に生成された漆液とは質が異なる場合が考えられる。

一漆液の生成は、葉が出てから加速する可能性がある。初鎌のときにも漆液を採取することは可能ではあるものの、量が出ない可能性がある。

③ワークショップ「学生と漆をかんがえる」

(コーディネーター：森下航平・京都大学総合人間学部4回生)

森下航平(京都大学総合人間学部4回生)による、京都府「学生×地域つながる未来プロジェクト」活動の説明のうち、漆に関するワークショップに移った。ワークショップでは参加者らは5つのグループに分かれて、①今回のイベントへの参加の動機、②あなたが魅力を感じる漆製品、③漆の魅力や可能性、について意見交換した。



(ワークショップの様子)



(会場では、漆掻き道具や漆製品、学生による活動の紹介パネルなどが展示された。)

<ワークショップの流れ>

- ① 自己紹介
- ② お題A：今回のイベントへの参加の動機は何ですか？
- ③ お題B：あなたが魅力を感じるのは、どのような漆製品ですか？
- ④ お題C：あなたが思う、漆の魅力や可能性は何ですか？
- ⑤ 各グループからの発表

<参加者からの意見>

(魅力を感じる漆製品)

漆工技術に対して…加飾、朱溜、陶胎漆器
器以外として…文房具、アウトドア用品、自転車
文化的なもの…文化財、阿修羅の乾漆像、刀

器として…漆器、カトラリー（スプーンなど）、箸
建築関係にも…建材、建物の内装、フローリング
芸術的なもの…オブジェ、芸術品

(新たな漆塗り製品のアイデア)

高級車の内装、使い捨てのもの、ライダースーツ、改札口、わっぱ弁当

(漆の魅力や可能性)

塗面の魅力・特徴… 手触りや質感、表面のつや、高級感、ぬくもり、使い込むことによる味、マットさ、温かい感覚、安心できる、目を引く見た目である、修理可能である、艶の変化、透明感、漆黒の色、液体から固形物を作れること、様々なタイとのコラボレーション、塗りの手軽さ

価値観… 貴重性、地元産品である、ブランド力、未知さ、伸びしろの大きさ、漆をめぐる捉え方の違い、人をひきつける何かがある、学びの素材

エコロジック的観点… エコな材料である、木のすべてを活用できる、環境にやさしい、生産の持続性、抗菌性、保存性、地域資源、人と自然のよりよい関係、自然物

文化的観点… 人々の精神性、生命力、複雑さ、希少価値

使い方の特徴… 日常使いできる、作り手の思いが伝わる、身近さ、美しさの持続すること、化学的特性と合った伝統的な活用法、用途の多様性、金継ぎの美しさ

(漆の継承・発展のための意見)

漆製品関連… 手軽に使える製品になる可能性がある、身近な木製品に漆を塗れたら良い、ペーパーハニカムへ塗ることで軽量家具が作れないか、CNF(カーボンナノファイバー)と漆を組み合わせる車の外装に塗れないか、木全体を活用できないか

情報発信… 製品を通じた発信が大切だ

生産体制… 生産基盤の確立が重要である

2. 漆の植樹祭

<概要>

日時:令和4年11月12日(土)14時30分~17時00分

場所:京都府福知山市夜久野町 体験農園(植栽地)、

やくの木と漆の館

<当日のスケジュール>

14:00~14:30 受付

14:30~15:15 植栽作業、名前付け

15:15~17:00 「やくの木と漆の館」自由見学



(集合写真。)

<内容>

山内、齊藤(NPO法人丹波漆)による作業方法の説明ののち、参加者らは二人一組にて植栽作業を行った。また参加者らは、植栽した木に名前を付けた。植栽作業終了後、希望者で「やくの木と漆の館」を見学した。



(植樹の様子。)

3. 参加学生の感想

・ワークショップでは、参加者のうち複数から「漆塗り製品は自然由来の素材であり安心であることが魅力である」との意見がありました。「安心を感じさせる製品」というコンセプトは、漆製品の可能性を広げることにつながりそうだと思います。また「漆には解明されていないことがたくさんあるが、わからないことがあることこそが人を引き付ける要因なのではないか」という意見が印象的で、人間が感じる興味や魅力について再考する機会となりました。

(森下航平・京都大学総合人間学部)

・漆とは何かを様々な角度から深めることのできたワークショップでした。生産者や職人の方、NPO法人丹波漆など異なる立場で漆に携わる人が語る“漆の魅力”には、今までの自分が思いつかなかったようなものも多数あり、本当に興味深かったです。今後も、このようなイベントが開催され続けることで、漆をより身近に感じ、興味を持ってくれる人が増えるのではないかと思います。

(岡野太郎・名古屋大学経済学部)

・立場や漆への関心度が異なる方々と漆について意見交換できたのは非常に良かったです。漆への関心度や知識は人それぞれ違うからこそ、漆の魅力や可能性についてもそれぞれ注目している部分が違って面白かったですし、丹波漆を継承していくことの意義は何なのか改めて考えさせられました。充実した経験になりました。

(古田悠・南山大学人文学部)

・知らなかった漆の魅力について知ることができたり、漆に関わっている方がウルシの良さや価値を再認識したり新たな視点を得たいと話されており、意見交換を行う交流会の重要性を学ぶことができました。

(安河内陽菜・大阪成蹊大学経営学部)

・漆や漆製品についてより多くの人に知ってもらいたいと思うワークショップでした。参加者は全員漆に携わる仕事をされており、各々の職業に関する漆の知識をたくさん共有していただいたことで、これまで特別で高級なものであり自分とは遠い存在であると捉えていた漆や漆製品が、実際は自分が思っているよりも近い存在であることがわかりました。漆にあまり詳しくない私がこのワークショップに参加して漆を知ることで新たな発見があったように、漆を良く知らない方々へこれから漆の情報発信をすることで生まれる何かがあるのではないかと感じました。

(西辻栄里花・京都大学農学部)

・僭越ながらウルシの内樹皮と樹脂道について発表させていただきました。漆には多様な魅力があります。植物としてのウルシ、塗り物としての文化的価値など、様々な視点から漆を考える素晴らしい機会になったかと思います。漆を中心にたくさんの方が交流する場として、今後も続いてほしいイベントだと感じました。

(二社谷悠太・京都大学農学部)

京都ゆにくろ×漆工芸専攻 Kyoto urushi craft project

京都伝統工芸大学校漆工芸専攻の学生の皆さんが、7月に、丹波漆フィールドワークとして、漆掻き見学与福知山市やくの木と漆の館の見学をされました。

漆掻き見学では、今年掻いている漆の木、漆掻きの方法や道具について、漆液の採取量、採った後の漆の木のことなどを現場で聞いていただきました。

やくの木と漆の館見学では、丹波漆を用いて制作された多彩な商品から、丹波漆の特長や仕上がりの違いを知り、作品制作にも活きる数多くのアイデアを得られています。

ユニクロ様へのプレゼンと意見交換を経て、サステナビリティをテーマに、「衣食住」にまつわる作品をグループまたは個人で制作されました。

その展示の様子と、ユニクロ河原町店様の取り組みについてのインタビューを行っていただきましたので、ご紹介いたします。



(参考：京都伝統工芸大学校 ホームページより)



ユニクロ京都河原町店での展示企画

ユニクロ京都河原町店では、サステナブル活動の一環として、漆に関する展示ブースを設けている。京都府「学生×地域つながる未来プロジェクト」丹波漆チームに参加する学生らが2022年12月20日、オンラインでユニクロ京都河原町店へのインタビューを行った。ユニクロ京都河原町店は、現在、京都伝統工芸大学校漆工芸専攻との産学連携プロジェクト「Kyoto urushi craft project」に取り組んでいる。8月から10月は丹波漆に関する漆掻き道具等が展示され、11月からは京都伝統工芸大学校漆工芸専攻学生らの本プロジェ

クトの作品が展示されている。今年度のテーマは、漆。京都の人々にとって身近ではあるが、生産や歴史、特性について、あまり知られていないことを受けて設定されたという。

昨今、SDGs が叫ばれるようになって久しいが、アパレル産業は、非常に環境に負荷をかける業種である。原料の栽培、紡績、染色。衣料の製造には様々な資源が必要となり、また環境負荷が発生している。こうした現状を受け、ユニクロは、サステナブル活動へ、営業・販売活動と同等に注力している。

店長代行の安井さんは、今回の作品を展示した学生らについて、「作成過程でのやり取りを通し、材料に廃棄物を使うといったサステナビリティを意識するなど作品構想の変化が見られた」と振り返った。また、漆とサステナビリティの関係について、「地元の物、文化である漆は、天然のものであり、長持ちする。日用品に漆を塗るなどしてきたのは、モノを大切にするための先人の知恵である。」と述べ、地域の伝統工芸に対する理解を深め、その伝統を守り伝える意義を語ってくれた。

なお、本展示は来年2月3日まで、ユニクロ京都河原町店3階で行なわれる予定となっている。機会があればぜひ、足を運んでみてはいかがだろうか。

京都府「学生×地域つながる未来プロジェクト」丹波漆チーム
(岡野太郎、森下航平、古田悠、安河内陽菜)



(インタビューの様子。)

令和4年の漆掻きと漆植栽

山内耕祐（NPO 法人丹波漆）

1、漆掻き



夜久野町の額田地区と小倉地区にて、岡本嘉明氏の指導のもと、高橋治子、山内耕祐、齊藤善之の三名が、合計で13本の木で漆掻きを行いました。

掻いたウルシは何れも地域の山裾や法面に生える個体で、地権者や周辺住民の方々のご協力のおかげで漆掻きをさせて頂く事が出来ました。胸高直径と樹齢は額田地区にて25cm(約30年生)が2本、12~16cm(約15年生)が8本、小倉地区にて15~16cm(約15年生)が3本でした。6月9日に初鎌入れを行い、8月19日の17辺鎌(361.58g)には採集量のピークを迎え、10月9日に26辺鎌を行い辺掻きは終了しました。採集量の合計は4824gでした。春以降例年より暖かく、採集量のピークが前倒して来た個体もあるなど、経験にない推移の仕方ではありますが、全体としては良く採れました。

昨年に引き続き、セシメ漆・枝漆の採取にも取り組みました。10月半ばに伐採した後、流水に浸し保管した枝に、12月1日に傷を付け、約46gの漆を採集しました。セシメ漆・枝漆の採集は、量の面では効率が良いとは言えませんが、丹波の漆かきの一行程として技術継承に取り組んでいます。今後、質的な特徴を生かした利用や体験メニューとしての活用等も模索していきたいと考えます。

現在行っている漆掻きは丹波の漆かき技術の継承を目的とし、NPO 法人丹波漆の行うウルシ植栽においては未だ十分な大きさに達している個体の数が限られているため、技術伝承に取り組む事のできる最小限の本数で行いました。また、地域のウルシの個体数の減少を防ぎ、継続的に原木資源を活用出来る様にする事を念頭に、漆掻きを行う個体の選定、掻いた後に萌芽更新する個体の保護を行っています。



額田地区の漆掻き現場

2、漆植栽

植栽地管理…下草刈り、獣害防止フェンスの維持等の管理作業を実施しました。気温や降水量の影響か、ウルシの伸長は全体的に旺盛でした。しかし9月以降、風により倒れてしまう被害が20本程度発生しました。被害を受けた植栽地においては根の損傷による病害への発展にも注意が必要になります。風の影響を受けにくい植栽方法及び健全な地下部の育成方法を模索する必要性が大きくなりました。令和4年春時点で累計の植栽本数は約1800本、総面積約3.6haとなりました。このうち胸高直径10cm以上が70本、5cm以上530本、5cm未満700本、枯死他500本となります。胸高直径10cm以上の個体については数年以内に漆掻きが可能になるのではと期待しています。生育不良の発生割合は、例えば黒ボク土の畑跡地17%、その他の畑跡地17%、水田跡地89%と大まかな比較で見ても、植わっている場所の条件により大きく異なる事が顕著です。生育状況の調査を継続、植栽地の土壌等の実態把握を進め、適正な管理を行いたいと思います。



風倒被害

新規植栽地整備…令和3年度に行ったウルシが自生している場所での新規植栽を本年度も実施します。その生育状況の観察や、周辺の土壌・地質・地形・植生を含む自生個体の調査等を通してウルシ植栽の好適条件を把握するとともに、山裾の里山的な活用に繋がりたいと考えます。また疫病菌(ファイトフトラ-シナモミ)の被害が確認されていた植栽地にて、当病害への薬剤散布試験のための植栽地整備を、森林総合研究所等の協力のもと実施しています。

苗木栽培…分根法により丹波1号、新文化、岡山2号の増殖・栽培を行い、405本の苗木が育ちました。これまで丹波漆では分根法による苗木生産に取り組んできました。これにより優良品種のクローンを増殖できる一方で、遺伝的に均一化されることで生じる様々な栽培におけるリスクも抱える事になります。分根も継続しつつ、実生による苗木生産にも取り組むことで、これらのリスクを分散すると共に、将来の新たな優良品種獲得のための資源作りにも繋がりたいと考えます。加えて、保育ブロックやコンテナによる苗木育成の導入など、健全な根の発達を促すための試みも行っています。



苗畑

社会貢献者表彰の受賞

公益財団法人社会貢献支援財団より、NPO法人丹波漆の活動に対して社会貢献者表彰を受賞させていただきました！
たくさんの方のご協力により受賞することができました。NPO法人丹波漆理事一同、感謝申し上げます。

自然相手の活動は、日々試行錯誤の連続です。近年の環境の変化や地域の少子化や高齢化の中で、いかにその地域に根ざしてきた伝統文化を守っていくのか、それに取り組んでいる若者が安心して文化を守ることに取り組めるかが、これからの伝統文化を継承していくための課題だと感じています。

また、自然環境の問題が取り沙汰されている現在、地域を守り、活かしていく手段としてもウルシの樹を植え、育てる活動自体も大切な役割を担い始めています。

この場をお借りして、当法人に理解を持って支援してくださっている皆様への感謝をお伝えすると共に、丹波漆生産組合時代の漆掻き職人達の地域に根差した技術を守り、伝えて行きたいという連綿と続いてきた思いを大切に、引き続き、今後も活動を続けていきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

※社会貢献者表彰とは…

公益財団法人社会貢献支援財団が行っている取り組みで、社会と人々の安寧と幸福のために尽くし、顕著な功績を挙げながら報われる機会の少なかった方を表彰し、日本財団賞が贈られるものです。候補者は、自薦他薦を問わず広く一般に公募され、学識経験者で構成される表彰選考委員会が、寄せられた推薦の功績内容を審査のうえ受賞者を選考します。

表彰式典は、毎年秋（平成28年度より夏と冬）に開催され、2022年12月に開催された第58回の式典では当法人を含む29団体・個人が受賞しました。

表彰対象者には、賞状及び日本財団賞が贈られます。また、その功績をまとめた記録集が作成され、全国の都道府県立図書館等に贈られます。



写真：福知山明智扇子「清竜」
(写真提供：福知山市)



NPO 法人丹波漆は、年間 100 本の植栽と、漆掻きの後継者の育成を目標に活動しています。

その運営には、皆さまのご支援・ご協力がなければ成り立ちません。

みなさまのあたたかいご支援をお待ちしています。

賛助会員（団体）…30,000 円

賛助会員（個人）…10,000 円

サポーター会員… 3,000 円（各一口）

お振込み先：

ゆうちょ銀行 振込専用口座 00920-0-209552

ゆうちょ口座間 記号 14430 番号 3724651

他金融機関から 店名 四四八（ヨンヨンハチ） 店番 448

種目 普通預金 番号 0372465

トクヒ) タンバウルシ

※ HP からも、クレジット払いで入金していただけるようになりました！

NPO 法人丹波漆 HP : tanbaurushi.org

会報たんばうるし 会報第 21 号

発行 NPO 法人丹波漆

〒629-1321

福知山市夜久野町直見 2452

tel: 090-8972-5062 (高橋)

fax: 0773-38-0425(事務局)

e-mail: info@tanbaurushi.org

2023.1.20



※事務所の住所が変更になっています！